

呼吸を感じる

東京かつしか赤十字母子医療センター 藤原 久子

面接の場面で、患者さんと息が合うとお互いの思いが通じ合ったという感覚が沸き起こり、今取り組んでいる問題を乗り越えて、一步前に進めたという実感があるのではないだろうか。面接において、クライアントに集中し「呼吸を感じる」ことは重要である。その中で、ここでは呼吸を合わせることに焦点を置いて面接した事例を報告する。

事例：Aさん70才、天涯孤独の男性。進行の早い肺がんで、来院時はすでに末期状態であった。初診からいくばくもたっていないある日、呼吸困難で入院してこられた。酸素を最大量まで流している状態ようやく呼吸が保たれていた。主治医からは、すぐに「転院調整依頼」がきた。「もはや急性期治療ができないので、予後告知をしたところ、ホスピスへの転院を希望されたので、できるだけ早く入れるホスピスを探してあげてほしい…」との付記がされていた。ソーシャルワーカー（以下SW）は、Aさんの思いを想像しながら意を決し、Aさんの重症個室を訪室した。

挨拶をし、呼吸をおいてゆっくり話を始めようとしたが、Aさんは、SWに口を挟ませないようにして、「まあ、僕の話聞いてくれ!」と言われた。Aさんの様子を見ると、冷静で澄んだ眼でこちらを見ておられる。酸素をMAX量で流された状態であるが、低めのはっきりした声が印象的で、彼の決意のような響きを感じた。僅かな「間」の間も、酸素のシャーシャーという音と、ハアハアという苦しそうな息遣いだけが、全身からSWに訴えかけていることを思わせた。『聞いてくれ!』と。その様子から、SWは、Aさんが大変重要な内容をご自身の精一杯のペースで必死に話そうとされていること、これを遮ってしまえば、二度と話していただけないのではないかと感じた。

こうしたAさんの様子を、SWも全身で受け止めようとした。Aさんとしっかり視線を合わせ、少しでも楽に話していただけるようにと、途切れがちながらもその息遣いを意識しながらテンポをAさんに合わせて相槌をうった。そして最後に、SWも低いはっきりとした声で「分かりました」と返事をした。その直後、Aさんは安堵の表情を浮かべて、苦しい息の下で、生い立ちや、家族が居て幸せな家庭を持っていた時期があったこと、働いていた時期、病を得てからの生活などなど、また残してきた財産の寄付先などもハッキリと話してくださった。時には面白おかしく話をして下さり、一緒に笑い・涙する日々が過ぎていった。SWは、どのような場合にあって、Aさんの息遣いと語りを乱さず、最小限の言葉と相槌により、会話を続けた。

ある日、いつもなら自分から話を始めるAさんが、黙ってSWの方を見つめている。SWは、Aさんの息遣いに集中し、全身の意識をAさんに向けた。そのとき、いつもよりゆっくりとした口調で、「あなたにも仕事があるだろう、仕事の話をしていいよ。」と、厳しい状況におかれた中でSWに優しく語りかけて下さった。Aさんの方がSWに呼吸を合わせてくださった瞬間であった。その時の少し寂しそうだが、全てを達観したと思えるようなAさんの表情は忘れられない。

あと数日もつかどうかかわからないと言われながら、ホスピスへの転院となった。転院後も2回ほど見舞いに行ったが、その時には苦しい息の中でも、入院中のエピソードなどを、一緒に笑って話すことができた。急性期病院の入院1か月でホスピスへ転院、その後2週間で永眠という短くも大切な時間において何度も言葉を交わし、自分を理解してくれた相手として、また、共に過ごす相手として選んでもらえたと思っている。

本事例では、呼吸を合わせることを意識し、クライアントとの良好な関係を築くことができたが、「呼吸を感じる」実践にはさまざまな状況と対応が考えられる。個々に異なる状況の中でクライアントの呼吸を感じ、繊細な観察につなげたい。

（事例は、個人を特定する情報を極力削除し、再構成したものである。）